

SHOW HEY シネマール-4

★★★★

素敵なダイナマイトスキャンダル

2018年/日本映画

配給：東京テアトル/138分

2018 (平成30) 年3月24日鑑賞

テアトル梅田

Data

監督・脚本：富永昌敬

原作：末井昭「素敵なダイナマイトスキャンダル」(ちくま文庫刊)

出演：柄本佑/前田敦子/三浦透子
/峯田和伸/松重豊/村上淳/尾野真千子/中島歩/落合モトキ/木嶋のりこ/瑞乃サリー/政岡泰志/島本慶/菊地成孔/若葉竜也/嶋田久作

👁️👁️ みどころ

1967年3月、岡山の高校を卒業した末井昭氏は、大阪の工場に集団就職し、以降、昭和の激動の時代を、エロ雑誌の編集者として生き抜いた。そこには、母親の「ダイナマイトスキャンダル」の影響があったが、その「爆発的生きザマ」は興味深い。

同じ年に大阪大学法学部に入学した私の生きザマとは全く異質だが、よく考えてみると、その“爆発性”において多くの共通性も・・・

昭和の混とんの時代、何でもありの時代は1989年で終わったが、その後を継いだ平成の時代もまもなく終了。近々、末井氏も私も70歳を迎えるが、その“ダサイ人生”の仕舞い方は・・・？

富永昌敬監督は末井氏に対して「ダサイ人生の鐘を鳴らすのはあなた」とコラムを書き送ったが、私は私なりに鐘の鳴らし方をしっかり考えなければ・・・。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■原作者は私と同級生！私たちは昭和の申し子■

平成の時代はいよいよ平成31(2019)年4月をもって終了するが、その前の「昭和の時代」はいろいろな言葉で表現することができる。例えば、石原裕次郎と美空ひばりの時代、高倉健と吉永小百合の時代、そして『男はつらいよ』と『ALLWAYS』の時代等だ。それはまた同時に、高度経済成長の時代、ベトナム戦争の時代、学生運動の時代、バブルの時代とも言える。さらに、本作の主人公末井昭(柄本佑)の若き日のエロ雑誌、エロ写真を中心とする「爆発的生きザマ」を見れば、まさに昭和は混とんの時代、何でもありの時代、ハチャメチャな時代と言うこともできる。

もともと、1948年6月14日生まれで、2018年6月には70歳になる末井昭氏は、今や社会的名声を得て安定しているが、1967年の春に高校を卒業した後、大阪の工場に集団就職した時の彼はまさに海のものとも山のものともわからない素材。1949年1月26日生まれで、末井昭氏と同級生になる私は松山の愛光中学・高校を卒業し、1967年春に大阪大学法学部に入学した。その当時の私は末井昭氏とは違うエリート的な立場だったが、氏と同じように、海のものとも山のものともわからない素材だったことはまちがいない。そんな私たちは2人とも、まさに「昭和の申し子」だ。



『素敵なダイナマイトスキャンダル』
画・王雅（2018. 5）

■□■ 1967年の高卒後の数年間のもがき方にも共通点が！ ■□■

1967年3月に岡山の高校を卒業した末井（柄本佑）は大阪の工場へ集団就職。しかし、すぐに大阪の工場に絶望し、父親が出稼ぎに行っていた川崎の工場に再就職。やがて、父親と別居し、下宿先で恋人の牧子（前田敦子）と出会って同棲。そして、デザイン学校の夜間部に入学。このように、1967年4月から1970年2月までの約3年間を描く本作の導入部では、デザイン会社「作画会」に入社し、近松さん（峯田和伸）と出会う彼の激動の青春時代がメチャ面白いので、それに注目！

1968年10月当時に、末井が近松さんと喫茶店でデザイン談議に明け暮れる日々は、私が学生運動の中でビラ書きとアジ演説に明け暮れていた日々と全く同じだ。しかして、末井は1970年2月やっと「情念」を見つけ、「革命的デザインはキャバレーにある」ことを発見したが、私は1970年1月26日の誕生日にやっと我妻栄『債権総論』の基本書を購入し、司法試験の勉強を開始。私にとっても、自分の道をやっと見つけたのは、末井と同じ1970年1月だった。その後、彼はキャバレー「クインビー」に入社し、革命的デザインの数々を発表。そしてキャバレー「クインビー」では「太陽の塔」ならぬ「チンポの塔」を店内に打ち立てるも不評だったらしい。それに対して私は、1970年1月から1971年10月までの間、1人で下宿にこもり独学で司法試験の勉強を続けた。末井は1971年6月から「クインビー」時代の同僚・中崎（中島歩）に誘われ、『ヤングV』創刊号にイラストを描き始めたが、1971年10月に司法試験に合格した私は、1972年からは司法修習生となり、国家公務員並みの給料をもらえる安定した身分に。

このように1967年3月の高卒後の数年間の末井氏と私のもがき方にも共通点が！

■□■ 人生の宝は仲間・親友・同志！ 末井の場合は？ ■□■

末井のはじめての恋人が牧子なら、はじめての友達喫茶店でワケのわからないデザイン談議に明け暮れた近松さんだ。私は1972年から74年までの司法修習生時代と、1974年4月に大阪弁護士会で弁護士登録した後は、仕事も収入もまともな道を歩き始めたが、1971年から75年までの末井は、キャバレーやピンサロの世界で看板を描き、エロ雑誌でイラストを描く、かなりヤクザな毎日だったらしい。しかし、1975年12月にセルフ出版に入社し、『ニューセルフ』を創刊した後は、「エロ雑誌でありながらエロではない記事を増やしたい」、等とワケのわからないことを言いながら順調に業績を伸ばしたようだ。

また、私は1974年の弁護士登録後は、大阪国際空港弁護士会の一員に加わったことが、そして1979年の独立後はO弁護士やN弁護士等々、若手の優秀な弁護士と共に大阪モノレール訴訟や大阪阿倍野再開発訴訟等をしたことがその後の大きな財産になったが、それは末井も同じだ。「セルフ出版」以降の末井が、憧れの写真家荒木さん（後のアラーキー

こと荒木経惟)と出会ったのは大収穫。さらに喫茶「マジソン」時代の真鍋のおっちゃん(島本慶)や、スナック「茫洋」のクマさん(戌井昭人)らとの、仲間・親友・同志としての出会いが末井の一生の財産になったことは間違いない。

さらに、私は1979年の独立から自分の事務所を持ち、その5年後の1984年以降は「都市問題」に没頭したが、1981年に写真雑誌『写真時代』を創刊した末井は、以降警視庁保安1課風紀係・諸橋係長(松重豊)との戦いを交えながら、すさまじい活動を展開していくことに・・・。

■爆発は芸術だけに!「爆発心中」とはいやはや・・・■

人間は誰でも1つや2つは「イヤな思い出」を持っているが、普通それは公にせず、心の奥に秘めているものだ。それは、7才の時に母親の富子(尾野真千子)がお隣の家の息子と心中死したという悲痛な体験をもつ末井も同じ。しかも、それがダイナマイトを胸に巻いての「爆発心中」だったのだから、末井がわざわざそれを世間に公表しなかったのは当然だ。しかし、高校を卒業して大阪で働き始め、近松さんや恋人の牧子、その他の人々と少しずつそんな体験談を話し始めると、そんな「ネタ」に興味を示す人々も。

母親の爆発死を純粹に面白がってくれる人がいることを末井が知ったのは、世間では藤竜也と松田暎子のセックスシーンが社会問題になった大島渚監督の『愛のコリーダ』(76年)が公開された1976年頃だ。その頃には末井はアラーキーこと荒木経惟との仕事も順調にこなしていたから、末井はやっと母親の「素敵なダイナマイトスキャンダル」から「離脱」し「自立」することができたらしい。その結果、牧子を口説くときはいかにも素朴そうだった末井も、編集部の新入女子社員の笛子(三浦透子)に夢中になって口説き始めると、そこでは母親のダイナマイト心中の話題をうまく取り入れるまでに急成長!

1970年に開催された「大阪万博」では、岡本太郎製作の「太陽の塔」が大人気となり、彼の「芸術は爆発だ!」のキャッチフレーズが流行に流行ったが、まさか心中にも爆発が・・・。しかも「素敵なダイナマイト心中」とはいやはや・・・。

■エロと芸術の境界は?「表現者」と官憲との戦いは?■

1969年には、いわゆるブルーフィルムではなく、一般の映画館で公開された武智鉄二監督の『黒い雪』(65年)が刑法175条にいわゆる猥褻凶画公然陳列罪に該当するか否かについての東京高裁判決(昭和44年9月17日判決)が下された。また、私が26期司法修習生として大阪で検察修習をしていた1972年には、大阪の下町・野田にある吉野ミュージック劇場での引退興行をしていた若きストリッパーの公判一条さゆりが逮捕されるという、一条さゆり「濡れた欲情」事件が発生し、担当検事の活躍ぶりを傍聴・見学した。このように憲法21条が規定する「表現の自由」を巡っての、「エロか芸術か」という大論争は当時の日本中を揺るがしていた。

しかして、本作には警視庁の保安一課で厳格にエロ雑誌の検閲を担当している諸橋係長（松重豊）と、その「詰問」にのりくらりと答える（逃げ回る？）末井との「論争」（？）風景が登場するので、それに注目！ピニ本が登場し、ヘアが透けて見えるかどうかの議論に熱中していた「あの時代」を経て、いわゆるAV全盛の時代になっていったわけだが、そんな「昭和の時代」は懐かしい思い出。「ノーパン喫茶」の登場は1981年。そして、末井が『写真時代』を刊行したのも同じ1981年。また、『素敵なダイナマイトスキャンダル』を刊行したのは、1982年だ。しかし、遂に1988年『写真時代』が発禁処分を受け廃刊にされると、それと軌を一にするかのように1989年1月には昭和の時代が終わり、平成の時代に入った。そしてバブルは崩壊・・・。

■□■彼の、そして私の「ダサイ人生」の仕舞いは・・・？■□■

本作を監督した富永昌敬氏は1975年生まれで、私と同じ愛媛県の出身。私は彼と同じように、あの昭和の時代を「爆発的」に生きてきた人間として末井氏に興味を持ったが、パンフレットにある富永監督の「ダサイ人生の鐘を鳴らすのはあなた」というコラムを読めば、彼は彼なりに大きく末井氏に入れ込んでいたことがよくわかる。私は富永監督の作品は『パンドラの匣』（09年）と『乱暴と待機』（10年）しか観ていないし、その評価も低い。直近の『南瓜とマヨネーズ』（17年）も、友人から「つまらなかった」との声を聞き、「ああ、やっぱり」と考えて観ていない。しかし、本作は末井氏への興味と柄本佑の演技力に期待して観に行ったところ、大きな収穫があった。

昭和の時代を劇的に戦い抜いた末井氏も、1989年1月に平成の時代に入ってから格別目立った活躍はない。サックス奏者でもある彼が現在哀愁歌謡バンド「ペーソス」のメンバーとして全国でライブ活動を行っているようだから、いわば悠々自適の日々・・・？したがって、今年70歳を迎える本作が彼にとって大きな区切りになったはず。つまり、末井氏は、本作によって富永監督が言うように「ダサイ人生の鐘を鳴らされた」はずだ。

しかして、来年1月に70歳を迎える私は、私なりのダサイ人生の鐘をどのように鳴らせばいいのだろうか。つまり、私なりのダサイ人生の仕舞いは・・・？本作の鑑賞を契機として、それをしっかり考えたい。

2018（平成30年）年3月30日記